＜関係時期の天皇＞

代（生－ 在～位－没）	天皇		父	母	
72(1053-1073~1087-1129)	白河		後三条	茂子	
73(1079-1087~1107)	堀川		白河	賢子	
74(1103-1107~1123-1156)	鳥羽		堀川	苡子	
75(1119-1123~1142-1164)	崇徳	保元で流罪	鳥羽	待賢門院璋子	
76(1139-1142~1155)	近衛	病死(16)	鳥羽	美福門院得子	
77(1127-1155~1158-1192)	後白河	二条への中継	鳥羽	待賢門院璋子	
78(1143-1158~1165)	二条	病死(22)／美福	後白河	源　懿子	
79(1164-1165~1168-1176)	六条	病死(12)	二条	伊岐致遠	
80(1161-1168~1180-1181)	高倉	病死(20)	後白河	平　滋子	
81(1173-1180~1185)	安徳	壇ノ浦に入水	高倉	建礼門院徳子	

＜平氏の棟梁＞

正盛（　?~1121）平家興隆の礎
忠盛（1096~1153）日宋貿易で富を蓄えた
清盛（1118~1181）1167（太政大臣）

◆保元の乱(1156)
　○後白河側=750人程度
　×崇徳側=200人程度（興福寺僧兵を見込むが来なかった）
◆平治の乱(1159)
　○六波羅側=3000人程度
　×信頼側=800人程度(源頼政300は様子見で戦に加わらず)
◆源平の戦い(1180富士川~1185壇ノ浦)
　×平家=当初1万人規模から、鎌倉勢力の伸長に伴い三千人程度に減少。壇ノ浦では約1000人程度。
　○源氏=徐々に兵数を増し約五千人。壇ノ浦では1500程度

◆**忠盛灯籠**(八坂神社拝殿の東側)=白河法王は祇園女御のもとに通う夜時雨に、灯籠火に浮かぶ蓑傘を着た鬼（？）を見て、忠盛に「切り殺せ」と命じた。忠盛が取り押さえてみると、灯籠に火を入れる油坊主だった。法王は忠盛の冷静沈着を褒め、寵愛する祇園女御を与えた。このとき女御は法王の子を身ごもっており、のちに生まれたのが清盛だった(平家物語)。

◆**祇園堂**(円山音楽堂の西側)=この近くに祇園女御の屋敷があった。白河法王の崩御後女御は隣接地に阿弥陀堂を建て、法王の菩提を弔って余生を過ごしたという。堂の入口には祇園女御供養塔がある。
＊①女御の位は中宮に次ぎ殿舎もあった・・・祇園女御には宣旨がなかった。　②清盛公が誰の腹から生れた？は諸説あり。

◆**崇徳天皇御廟**=保元の乱に敗れた崇徳上皇は、讃岐国に配流され、1164年・46才で崩じ、白峯山陵に奉葬された。寵愛厚かった阿波内侍が遺髪を請い受けて、ここに塚を築き亡き天皇の霊を慰めたと伝えられる。
毎月21日を崇徳上皇の月命日として白峯神宮の神職が奉仕し月次祭が行われる。　阿波内侍は建礼門院徳子（1172年高倉天皇の中宮）の女房となり、1185年の平家滅亡後は大原寂光院に入り建礼門院とともに平家の菩提を弔い余生を過ごした。

◆**六道珍皇寺**（836創建）=この辺りは鳥辺野の風葬地で、この世とあの世を隔てる「六道の辻」と呼ばれていた。境内の閻魔堂には小野篁(たかむら=802~853)と閻魔大王の木像が祀られている。
篁は文章生試に及第し、東宮学士にも選ばれた秀才だったが、昼は朝廷に勤め、夜は冥界に通い閻魔大王の六道裁判を補佐した（寺伝）。「冥土通いの井戸」「黄泉がえりの井戸」がある。
1110年に**平正盛**が珍皇寺から土地の一角一町四方を借りて常光寺（忠盛堂）を建てたのが始まりで六波羅第へと繋がった。
＊**六道界**=人は生前の行いに従い死後六つの世界に赴くという輪廻転生思想→天道・人間道・修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道

◆**六波羅蜜寺**=951年に市聖・空也が十一面観音を本尊とする道場・西光寺を開いたのを始まり。空也死後の977年、延暦寺の僧・中信が中興し「六波羅蜜寺」と改称した。この辺は「**六原**」と呼ばれていたことに由来する。
平**忠盛**のとき、当寺の塔頭に平家軍勢が駐屯するようになり、平清盛になって寺は平家の屋敷群に取り込まれ、内外一帯は平家一門の屋敷が5,200棟余りも営まれた。
1183年平氏都落ちのとき、当寺の諸堂は類焼し本堂のみ残った。のちに当地には鎌倉幕府によって六波羅探題が置かれた。
＊**六波羅蜜**（仏教の求道者が実践すべき六種の徳目）=「布施」「持戒」「忍辱」「精進」「禅定」「智慧」

◆**耳塚**（豊国神社の西）=1592~1598年、豊臣秀吉が送った遠征軍と明・朝鮮軍の戦い＜**文禄**(1592~93)・**慶長**(1597~98)**の役**＞は16世紀における世界最大級の戦争といわれる。前後総兵力は、名護屋滞在（10万人）、朝鮮出兵（16万～20万）になった。　敵の首の代わりに耳や鼻を削いで塩や酢漬にして送るようになったのは慶長のころからで、秀吉は1597年、これを埋める「鼻塚」を造り翌年これを拡張した。
この戦争は「やきもの戦争」といわれたように多くの陶工が日本に連れ去られ(2~10万)、その他にも織物や金属活字、儒学などが日本にもたらされた。

◆**若一**(にゃくいち)**神社**=（由緒より）光仁天皇のころ、唐から来た威光上人は迷い苦しむ人々を救わんと熊野に詣で、若一王子の分霊を授けられ当地に至り、神意に従い森の古堂に分霊を安置した。しかし御神体はその後の地変によって土中に隠れてしまった。
六波羅の清盛公は風光明美な当地に西八条別邸を造営し、1166年熊野に詣でた。そのとき「土中に隠れし神体を世に出し奉斎せよ」と熊野権現のお告げがあった。帰京した清盛公が西八条の邸地を探し歩くと東方築山より放つ光を発見し、自ら三尺ほど掘ると、土中より若一神社の御神体が現れたので、そこに社を造り鎮守すると、翌年には太政大臣に任ぜられた。このことから当社は開運出世の神様といわれるようになった。（西八条第6町=約60000㎡／約18000坪）
熊野十二所権現=三所権現・四所明神・五所王子
（若一王子は第一位の神仏習合の神